



## アノニマスデザイン/ 匿名のデザインという言葉 「作家性の商品化」の次に来るもの

文/玉田敦士 取材協力/株式会社千金堂

「用の美」という言葉があります。これは「民芸」と呼ばれる詠み人知らずの生活器具に、かけがえない美しさを見出した柳宗悦（やなぎ むねよし）がよく使った言葉です。大正時代から昭和初期にかけて彼が唱導した「民芸運動」は、名もなき民衆が大切に使用している生活用具に注目し、それを作る人の精魂に目を向けた画期的なものでした。西洋が優れていて、東洋や日本が遅れているという一部の考え方の虚妄をつく、デザインのムーブメントとして、今でも多くの人に影響を与え続けています。

柳宗悦は、社会の近代化が民衆の手作業を徐々に消滅させていく時代背景も手伝って、「民芸」と「工業化」を対立するものとして捉えていました。

一方、その息子の柳宗理（やなぎ そうり）は、戦後に活躍した人です。今でもスタンダードな生活の器具として使われ続けているヤカンやフライパンなどのデザインで知られる工業デザイナー。父親が起こした「民芸運動」と対立するものとして考えられていた「工業化」の世界に、親に逆らって飛び込んでいった人です。

でも、さすがだと思わせるのは、父親の柳宗悦が使った「用の美」の現代版ともいえる概念を提示したのです。それがここで注目したい「アノニマス デザイン」という言葉です。

「アノニマス」とは本来「匿名」という意味、芸術作品や建築家の建造物のように、作家性を一番初めに標榜するものと違い、世の中には、だれがデザインしたかわからないけれど、人に使われ続け、愛され続ける「秀逸な形」のデザインがあり

ます。その素晴らしさを彼は、工業デザインのなかに再発見したのです。たとえば、絆創膏やジーンズ、登山用具、剣道の道具、歩道橋など、数え上げればきりがありません。しかしその秀逸な形が出来上がるには、機能や汎用性を突き詰めた「デザイン行為」があるはずなのです。柳宗理は、工業デザインの世界に、現代という時代における「用の美」を再発見したのです。

そもそも、柳宗理がイームズチェアで有名なチャールズ・イームズの家を訪問したとき、お茶と一緒に角砂糖が実験用のガラス器にそえて出されたのが、アノニマス発言のきっかけなのだそうです。今でも独り歩きし、やや暴走気味の「デザイン」という言葉の意味を、根底から考え直させてくれる、いい逸話だと思います。

**LGSシステムの発想は、  
「部分が全体で全体が部分」  
これもアノニマスデザインに  
通じるキーワード。**

工業デザインの世界は、ある意味謙虚な世界です。単独の商品の機能や使い勝手を極限まで考え抜く。「もの」を通じて、間接的に「こころ」を感じてもらおうという営為です。

一方で建築は、「あなたはここで豊かな人生を過ごさなさい」という上から目線の総合的なデザイン行為。むしろ、「建築設計」という営みの中には、人の行為や気持ちまでコントロールしようという「作為」がそもそも内在していると言えるかもしれません。たとえそれが「善意」であった



としてもです。そして、その「作為」の的が外れていたとき、巨大な「異物」が無意味に地上に存在することになるという恐ろしさもあります。「はこもの」として批判される公共施設の中には、明らかに「建築設計の大きなお世話」的なものがあることも事実でしょう。その「作為」に対する鋭い問いかけとして、今再び「アノニマスデザイン」が注目されているのです。

そしてその観点から考えると、LGSシステムは建築システムでありながら、極めて工業デザインに近い性質を持っています。それは、「部分が全体で全体が部分」というこのシステムのキーコンセプトによく表れています。システムの洗練は、ひとえに、いかに合理的に、いかに簡便に、いかに使い勝手よく自由に。という性能の向上に集中します。様々な用途に応じて、ユーザーが豊かに、自由にその建物を使いこなせること。いわばユーザーの顔をイメージしながら、パーツのシステムにのみ目を向けて謙虚に改良、カイゼンを重ねていくのです。そこには、建物をアートするという「作家性」はありません。レゴ建築は、ユーザーの自由な発想で、いかようにでも組み立てられる、「開かれたシステム」として存在します。その組み合わせが結果的に建築になる。その意味で、LGSシステムは、一人歩きするキャッチコピーとしての「デザイン」という言葉を相対化する視点を保持し続けるのです。「デザイン」は本来、アートと違って、もっと謙虚な、システムティックな言葉なのだと思います。すなわち本来アノニマスなものなのです。